特別講座❷ 長文読解

標準問題

▲△▲ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〈神奈川〉

君はこう考えたことはないか？

世界中の人がみんな同じ言葉で話せたらいいのにな。私も外国でなかなか自分の言うことが通じないときなど、外国語が恨めしく思うときがある。でも、世界には無数の言葉があった方がいいと思いなおす。なぜなら、言葉が同じなら、誰もが同じようなことしか考えられなくなるからだ。自分と似たことを言ったり、やったりする奴が世界に何万人もいたら、自分なんてこの世にいなくたって済むではないか。人と違う言葉を話す……それ自体が価値を生むのだ。

たとえば、日本語の「幸せ」に当たる言葉は、英語ではハッピーといい、ロシア語ではスチャースチエという。しかし、その単語を発音しても、幸せのニュアンス*は伝わらない。ハッピーはどこか快楽と結びつく感じがし、スチャースチエは神に願いをかなえられた感じがあり、幸せは慎ましく、ほのぼのした願いといった感がある。このズレこそがコミュニケーションの楽しみである。▲

私は外国語を話すのが好きだ。たとえば、ケニアのサバンナでマサイの人にアサンテ・サーナと言えば、カリブーと返事が返ってくる。ありがとう、どういたしまして、という意味だ。あるいは、フィンランドのラップランドで、ハウスカ・トゥトゥストゥアと言えば、サーミ*は喜んで君を家に迎え入れてくれるだろう。それはお会いできて嬉しいです、という意味になる。初めは君の耳に全く無意味な音の連なりとしか聞こえない外国語も、実際に使ってみると、相手に通じるばかりか、特定の反応を示してくれる。

英語を流暢に話す人も、フランス語が得意な人も、最初は恐る恐る使ってみて、少しずつ慣れてゆくものなのだ。言葉が違えば、考え方も違う。人は外国語を学ぶたびに、新たなものの考え方や、ものの見方をも学ぶ。外国語学習の第一歩は、子どものようになって、その言葉で使われている文字や音に慣れることから始まる。それは二度三度と子どもに戻るレッスンになる。そして、気づいてみれば、君は複数のものの考え方やものの見方を身につけている。

今、君が使っている日本語には、明治時代や江戸時代には想像もできなかったほどたくさんの外来語が入り込んでいる。英語のままのもの、フランス語やイタリア語から入ったもの、さらにはロシア語やドイツ語から紛れ込んできたものなど数え切れないほどある。君がよく口ずさむ歌も英語だらけだ。いざ、君が一切の外来語を使わずに、話をしようとしても、ほとんど不可能だろう。なぜ、こうなってしまったのか？　一つには、南蛮貿易の時代とは比べ物にならないくらい大量の情報と物とが絶え間なく交錯しているからだ。日本が外国との貿易関係なしには存在できないのと同じように、①日本語も外国語との結びつきなしにはあり得ないのだ。

しかし、ここで注意しなければならないのは、日本語の中に英語がたくさん入っていることと、私たちが英語を流暢に話すこととは全く別のことだということだ。日本語の文法は相変わらずで、英語の単語や短い言い回しがそのまま、テニヲハで接着されているだけだからだ。日本語はちょうど、輸入品をたくさん取り揃えているデパートのようになっている。

②ザビエルや黒船が日本に来た頃と較べたら、日本語はあらゆることを表現できるようになったかもしれない。しかし、使える言葉があり過ぎて、案外、自分の頭を使って考える機会が失われているかもしれない。自由とか神経といった言葉は、江戸時代にはなかった。たとえば、自由という言葉を使わずに、それが意味することを表現してみろと言われたら、かなり苦労するだろう。

日本語は最初からそんなに便利な言葉だったわけではない。君の先祖たちが

出題傾向

- 入試では、論説文よりも小説の方が長文で出題されることが多い。
- 論説文では話題や段落ごとの要点や筆者の考えが、小説では場面や登場人物の心情や主題がわかるところをチェックしながら読む習慣をつけよう。

さまざまな体験、試行錯誤、誤解、対決を通じて、少しずつこしらえてきたものだ。その恩恵を忘れてはならない。*シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』を読めるのも、吹き替えにしろ、字幕スーパーにしろ、ハリウッドの映画を見て、感動したり、首を傾げたりできるのは、先祖たちが日本語の改良に努めたからだ。君の爺さん、婆さん、曾爺さん、曾婆さんたちも、今君が使っている日本語を作ってきたのだ。君も名前くらいは聞いたことはあるだろう、樋口一葉、森鷗外、夏目漱石、芥川龍之介、谷崎潤一郎くらいは。彼らもまた、日本語を使って、世界と戦い、世界に通用する生き方、考え方を編み出してきたのだ。

日本語には、単に喜怒哀楽を表現する以外にもさまざまな利用法があることを忘れてはならない。

私自身も日本文学の末端で、日本語と日々格闘している者だ。私の小説は必ずしも、読みやすいものではないけれども、それは③言葉が持っている二重、三重の意味作用にこだわるからだ。

たとえば、タイムマシンという言葉。その意味は六歳の子どもも、ドラえもんなどを通じて知っている。思い通りに過去や未来に旅ができる一種の乗り物だが、私は全く違うタイプのタイムマシンを考えたことがある。それはベニヤ板でできていて、見た目は犬小屋にそっくりだ。とてもゆっくり時空を越えて行くタイムマシンで、二十年後の未来へゆくのに二十年もかかる。それじゃ、タイムマシンに乗らなくてもいいじゃないか、と君は思うかもしれない。普通に二十年間暮らしていても、二十年後の未来に行くことができるのだから。

［A］、そのタイムマシンに乗っていると、昼と夜が逆転したり、一分が一時間に感じられたり、一週間が一日に感じられたり、時間の感覚が狂う。［B］、暗闇で外界と遮断されているうちに、自分の過去をじっくり回想することもできるので、過去へ旅するのも容易だ。このタイプのタイムマシンは誰でも作ることができる。タイムマシンの*定義を、「時間の感覚を狂わせる機械」という風に変えてしまえば。

小説家は言葉をこんな風に用いる商売でもあるので、時に言葉の魔術師だとか、詐欺師などと呼ばれもする。しかし、世の中にはもっと巧妙に人を欺く人々がいる。判りやすく、聞いていて気持ちのいい言葉には嘘があると言っても過言ではない。君たちは下手に言葉に騙されないよう、自らを訓練しなければならない。その訓練の手伝いに、小説が少しでも役立てばいい、と私は思っている。そして、きょうはどの言葉の定義を変えてやろうかと考えている。

現在、日本語は、中国や韓国、東南アジアの国々やオーストラリア、アメリカなどでも多くの人々に学ばれている言葉だ。今後も、私たちは日本語をあとから学ぶ人たちと出会う機会が増えるだろう。私たちは、彼らに言葉を教える立場になる。教える立場になってみて、君は初めて、日本語はどういう言葉なのかを知ることになるだろう。外国人が頭を悩ませる日本語のテニヲハや敬語や主語の省略について、改めて考える機会を持つことになるだろう。そのとき、君は、外国語との比較で日本語をとらえ直すことができる。

その意味では、古典の勉強もまた、日本語を外国語のように扱うところがある。『源氏物語』や『平家物語』を読むとき、敬語の規則や動詞の活用を学んだ覚えがあるけれども、なかなか面倒だった。しかし、昔の日本人がどのように日本語を使っていたかを知るためには、文法の学習だけでは足りない。生活上の流儀や趣味、恋の作法、自然との関係、その他多くのことを言葉の向こうに④読み取らなければならない。それは外国語の学習も同じだ。

日本語はとても影響力のある言語になった。日本語がどこでも通じるようになれば、便利だと思うかもしれないが、外国語を学ぶ動機がますます希薄になるとしたら、それは日本語自体も貧しくする結果になってしまう。

〈島田雅彦「いまを生きるための教室　死を想え　国語・外国語」より〉

※一部表記を改めたところがあります。

（注）　ニュアンス＝言葉の微妙な意味合い。
サーミ＝ラップランド地方に住む民族。
シェイクスピア＝イギリスの詩人・劇作家（一五六四～一六一六）。『ロミオとジュリエット』はその代表的戯曲。
定義＝言葉でものの意味や内容を限定して説明したもの。

(1) □ A・Bに当てはまる言葉の組み合わせとして適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア A けれども B また　イ A つまり B だから
ウ A すなわち B さらに　エ A しかし B なぜなら

□

(2) ——線①「日本語も外国語との結びつきなしにはあり得ない」とありますが、それを説明したものとして適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日本語がずっと昔から外来の漢字を使っているように、外来語の流入は近年になって始まったわけではないため、今さら日本語から外来語を排除することは考えられなくなっている。

イ 世界中で情報と物の交錯が絶え間なく進行し、国や言葉の境界があいまいになってきたため、日本語と外国語も文法の変化をともなって融合(ゆうごう)することが当然の成り行きになっている。

ウ 他の国々と大量の情報や物の行き来が盛んな時代になって、外国語が大量に日本語の中に流入しているため、外来語を用いない日本語の表現は考えられなくなっている。

エ さまざまな分野で国際化が進む中で、日本も必要な情報や物の多くを海外に依存せざるを得ない状況にあるため、これからの日本人には外国語の習得が必要不可欠になっている。

□

(3) ——線②「ザビエルや黒船が日本に来た頃と較べたら、日本語はあらゆることを表現できるようになった」とありますが、それを説明したものとして適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 明治時代以降の日本語を改良していく歴史において、先祖があらゆる外来語をそれ以前からある日本の言葉に置き換えて表現してきたことにより、日本語の表現能力が飛躍的に向上した。

イ 多くの外国語を日本語の中に取り込んだり、それまでの日本になかったものや考え方を表現できるようにしてきた先祖たちのおかげで、より多様な日本語の表現ができるようになった。

ウ 古来日本が言葉を使わなくても心が通じ合う文化を持っていたために、日本語は表現力が乏(とぼ)しかったが、流入した外来語を活用して現在のような高い表現能力をもつ言葉に生まれ変わった。

エ 先祖たちが苦労して改良した日本語を、文学者が文学作品という形にして世界と戦えるように示してくれたおかげで、日本語は世界を代表するすぐれた表現ができる言葉になった。

□

(4) ——線③「言葉が持っている二重、三重の意味作用」とありますが、それを説明したものとして適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 誰もが知っている意味だけでなく、新たに意味を与えることで表現の可能性が広がること。

イ 誰でも言葉の定義は変えられるので、どんなに言葉を選んでも複数の解釈が生じること。

ウ 小説家によって古い言葉をもとに次々と新しい表現が生み出されて言葉が豊かになること。

エ 言葉で世界と戦うことで世界に通用する考え方を身につけ、多様な場面で活用できること。

□

(5)　線④「それは外国語の学習も同じだ。」とありますが、筆者がそのように考える理由として適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　言葉の本質をとらえ流暢に使いこなすためには、十分な文法の学習とともに、絶えず教える立場に立って言葉を繰り返し考えるという経験が重要だから。

イ　言葉を習得するためには、まず文法を学習したうえで古典の本質を知り、現在の言葉との比較において言葉をとらえ直そうとすることが近道だから。

ウ　言葉がそれぞれの国でどのように使われているかを知るためには、文法の学習以上にその言葉を使っている人々の生活様式をまねするしか方法がないから。

エ　言葉を身につけるためには、文法の学習だけでなく、その言葉を使っている人々の生活や習慣など、その言葉のさまざまな背景を理解する必要があるから。

□

(6)　この文章の最初から▲までの文章を、次の１・２の条件を満たし、四十字以上五十字以内の一文で要約しなさい。

１　世界中の人が同じ言葉を話すことに対する筆者の考えとその根拠に触れること。

２　文末は「。」（句点）で終わること。これも字数に含めること。

40

(7)　国語の授業の中で、生徒たちがいくつかのグループをつくり、この文章を読んだうえでその内容について話し合いました。あるグループでそのときに出された意見のうち、筆者がこの文章で述べている内容と合わないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　「これまで覚えてきた英語の単語も、そのまま日本語に置き換えられるものだと思っていたけれど、生活習慣や考え方も違うのだから私たちの感覚とは微妙なズレもあるんだね。」

イ　「日常でも英語はたくさん使っているけれど、だからといって英語を上手に話せないのは、実際の英会話に必要な単語や言い回しがまだ日本語の中に定着してないからだったんだね。」

ウ　「小説を読むっていうことは、小説家が作品の言葉の中に込めた意味をつかむことを通して、私たちが日常生活の中で人の言葉が本当か嘘かを判断することにも役立つんだね。」

エ　「日本語がたくさんの外来語を取り入れてきた背景には、先人がそれだけたくさんの新しい考え方を吸収して日本語を便利にしてきた歴史があるということも言えそうだね。」

□

アドバイス

長文の論説文では、まず、文章の初めで述べている話題や、筆者の主張（結論）に注目して、何について述べた文章であるかを捉えよう。そのうえで、形式段落ごとの要点をつかみながら読み進め、短時間で文章の内容を理解することが重要になる。

そのためには、繰り返し使われているキーワードをチェックしたり、形式段落の初めに使われている接続語に注目したりして、段落ごとに「具体例や理由を挙げるなど事実を述べた段落」「筆者の考えが中心になっている段落」「まとめを述べた段落」などと区別してみよう。このとき、問題を提起している部分や筆者の考えの部分に印をつけておくと、問題を解くときに役立つことも多い。

発展問題

▲△▲ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。 〈東京改〉

高校生の美緒は、母親との言い争いをきっかけに、父方の祖父が営む岩手の染織工房で生活し始め織物制作を学んでいる。八月上旬、父親の広志から電話があり、母親と共に岩手に行くのでひとまず一緒に東京に帰らないかと言われた。同じ頃、ショール作りの練習として作り始めたカーテンの色を決めかねていた美緒は、祖父から「コレクションルーム」で気に入った色を探すように言われた。

「おどる12人のおひめさま」と書かれた背表紙を見つけ、美緒は本を手に取る。

「これ、この絵本。これはまったく同じのを持ってた。」

ページをめくると、森の風景が目の前に広がった。

十二人の姫君が楽しそうに銀の森、金の森、ダイヤモンドの森を進んでいく。

「でも、あれ？　なんか印象が違う……。すごくきれい。昔、読んだときは絵が怖くて、全然好きじゃなかったんだけど。」

祖父が隣の本棚の前に歩いていった。

「エロール・ル・カインが絵をつけたその話はグリム童話。ドイツ人の編纂だ。この話と似た伝承をイギリス人が編纂したものがある。そちらはカイ・ニールセンという画家が挿絵を描いているんだが。」

祖父が本を手に取り、戻ってきた。こちらのタイトルは漢字で「十二人の踊る姫君」とある。

あっ、と再び声が出た。

「それも持ってたよ。お誕生日のプレゼントにもらったの。」

ほお、と祖父が感心したような声を上げた。

「これはなかなか手に入りづらい本だ。ずいぶん探したんだろうな。」

それを聞いて、うしろめたくなった。

この本は四つの話を集めた童話集だ。長い間本棚に置いていたが、中学生になるとき、中学入試の問題集と一緒に処分しようとしたところを*祖母が見つけ、横浜の家に持ち帰っていった。

この本にもやはり森を抜けていく十二人の姫君の絵があった。繊細な線で描かれた絵がとても神秘的だ。

「こんなきれいな本だったっけ、これも。」

「日本の絵本もいいぞ。実はこれは*ホームスパンではないかと、私がひそかに思っている話がある。」

祖父がもう一冊、絵本を差し出した。

宮沢賢治・作、黒井健・絵「水仙月の四日」とある。

本の扉を開けると、雪をかぶった山の風景に目を奪われた。この数ヶ月ですっかり見覚えた山の形だ。

「これ、もしかして、岩手山？」

「宮沢賢治は花巻と盛岡で生きたお人だからな。」

さらにページをめくると、赤い毛布を頭からかぶった子どもが一人、雪原を行く姿が描かれていた。

「この子がかぶっているの、*私のショールみたい。」

そうだろう？　と答え、祖父は慈しむように文章を指でなぞった。

「ここに『赤い毛布』と書かれているが、私はこの子は赤いホームスパンをかぶっていたのだと思う。*雪童子の心をとらえ、子どもの命を守り抜いた赤い布は、田舎者の代名詞の赤毛布より、この子の母親が家で紡いで作った毛織物だと思ったほうがロマンがあるじゃないか。話のついでだ。私の自慢もしていいだろうか。」

「うん、聞かせて！」

祖父の手がのび、軽く頭に触れた。すぐに手は離れ、祖父はさらに奥の本棚へと歩いていった。一瞬だが、頭をなでられたことに気付き、きまりが悪いような、嬉しいような思いで、祖父の背中を追う。

①「ねえ、おじいちゃん。あの棚の本、あとで私の部屋に持っていっていい？」

「一声かけてくれれば、なんでも持っていっていいぞ。」

一番奥の棚の前で祖父が足を止めた。そこには分厚く横にふくらんだノート

が詰まっている。
　祖父が一冊を手に取った。左のページには折り畳まれた絵が一枚貼ってある。さきほど見た絵本「水仙月の四日」の一ページだ。
　右のページにはその絵に使われている色と、まったく同じ色に染められた糸の見本が貼ってあった。次のページには、たくさんの化学記号と数値が書き込まれている。
「これって、絵に使われた色を全部、糸に染めてあるの？」
「そうだよ。カイ・ニールセンやル・カインの絵本の糸もある。」
　祖父が別のノートを広げると、さきほど見た「十二人の踊る姫君」の絵が左ページに貼られていた。「ダイヤモンドの森」の場面だ。
　このノートも、「水仙月の四日」と同じく、絵に使われている色と同色の糸が右に貼られている。
「この糸で布を織ったら、絵が再現できるね。」
「織りで絵を表現するのは難しいが、刺繍という手もあるな。」
「この糸で何つくったの？　見せて！」
「何もつくっていない。狙った色がきちんと染められるかデータを取っていたんだ。ここにあるノートは私の父の代からの染めの記録だ。数値通りにすれば、完璧に染められるというわけでもないが、道しるべみたいなものだな。」
　下の棚にある古びたノートを取り出すと、紙は淡い茶色に変わっていた。鉛筆でびっしりと書かれている角張った文字は、祖父とは違う筆跡だ。
「もしかして、これが、ひいおじいちゃんの字？」
　祖父がうなずき、中段の棚から一冊を出した。
「このあたりの番号のノートから私も染めに参加している。この時期は父の助手だったが。」
②ノートをのぞくと角張った字と、流れるような書体の祖父の筆跡が混じっていた。
　曾祖父の存在を強く感じ、美緒はノートの字に触れてみる。
　顔も姿も想像できないが、何十年も前に、このノートに曾祖父が文字を書いたのだ。
「お父さんがこの前言ってた……。ひいおじいちゃんの口癖は『丁寧な仕事』と『暮らしに役立つモノづくり』だって。」
「古い話を広志もよく覚えていたな。」
　祖父が微笑み、羽箒で棚のほこりをはらった。
「おじいちゃんは、お父さんが仕事を継がなくてがっかりした？」
「がっかりはしなかった。」
③即答したが、そのあとの言葉に祖父は詰まった。
　しばらく黙ったのち、小さな声がした。
「ただ……寂しくはあったな。それでも、娘に美緒と名付けたと聞いたとき、広志が家業のことを深く思っていたのがわかった。だから、それでいいと思ったよ。」
「えっ？　そんな話は聞いたことない。私の名前に何か意味があるの？」
　祖父が、曾祖父がつけていたノートに目を落とした。
「美という漢字は、羊と大きいという字を合わせて作られた文字だ。緒とは糸、そして命という意味がある。美緒とはすなわち美しい糸、美しい命という意味だ。」
　美しい糸、と祖父がつぶやいた。
「美緒という名前のなかには、大きな羊と糸。私たちの仕事が入っている。家業は続かなくとも、美しい命の糸は続いていくんだ。」
④目の前にある大量のノートを美緒は見つめる。
　曾祖父と祖父が集めてきたデータの蓄積。このノートを使いこなせれば、自分が思った色に羊毛や糸を染めることができる。
　その技を持っているのは、さっき頭に触れた祖父の手だけだ。
「おじいちゃん……私、染めも自分でやってみたい。」
　祖父がノートを棚に戻した。
「染めは大人の仕事だ。熱いし、危ない。力仕事だから腰も痛める。染めの工程はこの間の*コチニール染めでわかっただろう？　それで十分だ。」

「熱いの大丈夫だよ。危ないことも気を付ける。」
「気を付けているときには事故はおきない。それがふっと途切れたときに間違いがおきるんだ。そのとき即座に対応できる決断力がほしい。私は年寄りだから、その力が鈍っているよ。美緒も決して得意なほうではないだろう。」
「でも……。」
「ショールの色は決まったか？　自分の好きな色、これからを託す色は見つけられたか？」
「まだ、です。探してるけど。」
ショールの色だけではなく、部屋のカーテンの色もまだ決められない。
口調は穏(おだ)やかだが、決断力に欠けていることを指摘され、顔が下を向いた。
*せがなくていい、と祖父がポケットから小さな紙を出した。
「色はゆっくり考えればいい。だが、そろそろ買い物に行ってくれるか。来週なんてすぐだぞ。お父さんたちをもてなす準備を始めようじゃないか。」
⑤はい、と小声で答え、美緒はメモを受け取る。
ショールの色だけではない。東京へひとまず帰るか、この夏ずっと祖父の家で過ごすか。
それを父に言う決断もつけられずにいる。
祖父のコレクションルームから気になる画集や絵本を部屋に運んだあと、いつもはスープを入れているステンレスボトルに水を入れ、盛岡の町に出かけた。

（伊吹有喜(いぶきゆき)「雲を紡ぐ」による）

（注）祖母＝美緒の母方の祖母。横浜に住んでいる。
ホームスパン＝手紡ぎの毛糸で手織りした毛織物。
私のショール＝美緒が生後間もない頃に父方の祖母から贈られた、とても大切にしている赤い手織のショール。
雪童子＝子供の姿をしている雪の精。
コチニール染め＝コチニールカイガラムシから採れる赤色の天然色素を用いた染色作業。
せがなくていい＝急がなくてよい。

(1) ―線①「ねえ、おじいちゃん。あの棚の本、あとで私の部屋に持っていっていい？」とありますが、このときの「美緒」の気持ちとして適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　幼い頃に感じられなかった、絵本の美しさや楽しさに気付かせてくれた祖父に親しみを抱き、祖父の本をもっと読みたいと思う気持ち。
イ　祖父が絵本に登場する服の色に着目していることに興味をもち、自分の本と棚の本を研究して、祖父に認めてもらいたいと思う気持ち。
ウ　祖父が親愛の情を示してくれたことを嬉しく感じ、自分が棚の本に興味を示すことによって、祖父をもっと喜ばせたいと思う気持ち。
エ　会話を通じて祖父の人柄や考え方にひかれ、祖父が集めてきた棚の本を読むことで、本の好みや選び方を知りたいと思う気持ち。

(2) ―線②「ノートをのぞくと角張った字と、流れるような書体の祖父の筆跡が混じっていた。」とありますが、この表現について説明したものとして適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　祖父が曾祖父の厳格さに反発する気持ちをもっていたことを、二人の対照的な書体を対比させて描くことで、象徴的に表現している。
イ　祖父が曾祖父と共に芸術的表現を追求していたことを、二人の筆跡をたとえを用いて技巧的に描くことで、情緒的(じょうちょ)に表現している。
ウ　祖父が曾祖父と共に染めに携わりつつ記録を引き継いできたことを、二人の異なる筆跡を視覚的に描くことで、印象的に表現している。
エ　祖父が曾祖父と共に色鮮やかで美しい糸を紡ぐ仕事を続けてきたことを、二人の字形や色彩を絵画的に描くことで、写実的に表現している。

(3)　線③「即答したが、そのあとの言葉に祖父は詰まった。」とありますが、「祖父」が「そのあとの言葉」に「詰まった」理由として適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　一度は否定したものの、当時を振り返って本当はがっかりしていたのだと思い直し、そのときの気持ちを美緒に伝えたいと思っていたから。

イ　息子が自立したときに抱いた切なさと、家業に対する息子の思いを推し量っていたことを振り返りつつ、美緒に伝える言葉を探していたから。

ウ　息子の進んだ道に理解を示しつつも、心の底に抱いてきた寂しさや疑問が不意に膨れ上がり、気持ちを懸命に抑えようとしていたから。

エ　気落ちしなかったと答えたのは、祖父としてただ威厳を示そうとしたためだったと気付き、美緒にどう説明すべきか迷っていたから。

□

(4)　線④「目の前にある大量のノートを美緒は見つめる。」とありますが、この表現から「美緒」のどのような様子が読み取れますか。「……と考えている様子。」に続くように、五十五字以内で書きなさい。

と考えている様子。

(5)　線⑤「はい、と小声で答え、美緒はメモを受け取る。」とありますが、このときの「美緒」の気持ちをまとめた次の文の□A□に当てはまる言葉を、文章中から十字以内で抜き出しなさい。また、□B□に当てはまる言葉を三十字以内で書きなさい。

▪祖父から□A□ことを言い当てられて落ち込み、父を迎えるにあたっては、□B□ことを思い出し、前向きになれない気持ち。

A

B

アドバイス

入試では、論説文よりも小説の方が長文になりやすいという傾向がある。文章が長くても、小説の基本的な読み方は変わらない。まず、登場人物を把握して、登場人物のおかれた状況や出来事（場面）を押さえる。次に、登場人物の心情に目を向ける。直接的な感情を表す言葉だけでなく、言動や情景描写や印象的な表現によって間接的に表されている心情にも注目しよう。途中で心情が変化している場合は、変化の理由を捉える。最後に、文章を通して作者が伝えようとしていること（主題）を考えよう。このような読み方をすることによって、速く正確に内容を読み取れるようになる。

文学的文章も、説明的文章と同様に、ポイントとなる部分にマークを付けながら読み進めると、解答時の助けになる。設問の内容を先に頭に入れてから文章を読むという方法もある。